

戦後復興へ向けての大分県立図書館

吉 田 豊 治

1.

平成7年2月28日、新しい県立図書館が公文書館、先哲史料館の3館複合施設「豊の国情報ライブラリー」として、大分市出身の世界的な建築家・磯崎新氏の設計で、「百柱の間」をはじめとする斬新なデザインで大分市南王子町に開館した。21世紀にむけた県民の生涯学習の一大拠点を目指した地下一階、地上6階（図書館部分3階）、図書館の蔵書能力160万冊という西日本有数のスケールを持つ施設がオープンしたのである。

11月1日には開館わずか8カ月で貸出冊数が60万冊に達したことが報じられており、新図書館の建築、開館がまさに時期を得たものであり、また県民から強く求められていたものであったことが実証されたと思われ、今後さらに他の2館とも十分連携を密にしながら、県民と最も関係の深い図書館としての機能を発揮されることを望んでやまない。

2.

図書館がその時代のニーズに応ずる機能を発揮する為には、内面的なものは勿論であるが、まずはそれを充たせる施設が必要であることはいうまでもない。昭和26年11月の県議会で、1議員より県立図書館の外観、内容ともに九州他県に比して、余りにも貧弱で、坪数、蔵書数、職員数とも図書館法の最低基準まで拡張すべきとの要求が出された。しかし実現しない中に本県出身の三浦義一氏より木下郁知事に母の意思で県民に報恩の図書館を寄付したいという申し出があり、県は当時新進建築家の磯崎新氏に設計を依頼して、新館建築にとりかかった。九州でも最も施設の整った鉄筋3階のモダンな、「図書館機能をこれまでの概念にとらわれずに設計した。将来の方向を考えて視聴覚の点にもウェイトをおき、十年後の状態にも対応できるようにした。技術的にも柱をほとんど使わず採光も各所から取り入れてみた」（『大分合同新聞』昭和40年2月19日号）といわれる新図書館が41年7月開館した。

その後蔵書数の増加で書庫は飽和状態になり、また構造上増改築は困難となり、また身障者への対応も応急的なものしかできないなどの種々の問題点がおこり、私が館長として赴任した63年当時再び新館建設構想が始まっていた。宮崎大学農学部の跡地に開館した宮崎県立図書館、開館間もない熊本県立図書館、建築中の徳島県立図書館などを視察し、さらに新図書館の場所をどこにするかなど候補地を副館長らと検討した。退職直前に新県立図書館等推進委員会も設置され、退職直後の平成4年4月に新館建設の為の準備室も設置された¹⁾。

3.

県立図書館は明治35年5月、大分県公立教育会付属図書館として、現在の大分中央警察署の場所（大分町）で開館、37年福沢記念図書館と改称した。大正10年九州沖縄連合共進会が大分市新川で開かれ、図書館の地に警察署が移転し、県会議事堂の南側（現在の府内町、総合庁舎の場所）に図書館は移転した。昭和6年県立移管が実現し大分県立大分図書館となった。しかし20年7月

16日の大分市の空襲で建物は焼失した。

戦争が終わると、食料難と活字に飢えきっている県民の為に、山室寿館長らの奔走で金池国民学校（現大分市立金池小学校）の一室を借りて、8月24日に再開した。敗戦で閉校した大分陸軍少年飛行兵学校の机や棚などの払い下げを受け、疎開先からの図書、新聞販売所から提供された新聞などを備え、9月9日からは日曜も開館（月曜休館）した。その後利用者の増加で3教室まで提供してくれた学校も、児童数の増加で移転を求めてきた。結局旧敷地に建築することになり、23年4月書庫もない平屋建ての仮建築で開館、24年3月閲覧室兼講堂、書庫も竣工して開館式をあげた。そして41年7月、戦後県議会として使用された旧公会堂の跡地に移転開館したのが、これまでなじまれ利用されていた、現在建築学会で強く保存を求められている建物である²⁾。

最初の場合の図書館の写真は『大分市史』（大正4年版）などにあるが、戦災で焼失した図書館の写真は県立図書館にも残っていない。私も家が上野にあった関係で図書館まででかけることも殆どなく、かすかに手前に児童室があり廊下を通して奥に広い一般の閲覧室があったように記憶している。

戦後入校したばかりの海軍兵学校から、焼け跡の広がる大分市に復員し、同級生のいる大分中学校に再び通うようになった時に、新聞を調べることも何かで母校に間借りしている図書館に行ったことを思い出す。20年の秋か、5年生になった21年の春かはっきりしないが、現在幼稚園のある場所に衛生館があり、その一室が図書館になっていた。その後第3校舎といわれた南側の校舎の東寄りの3教室に移ったと思う。22年焼け跡に復興した図書館は、暫く大分を離れた関係で25年頃から夏休みなどに何度か利用した。このように振り返ってみると最初の図書館を除いて、現在の新図書館まで5か所の図書館を利用したことになる。当然施設も機能も充実してきているが、しかし図書館は利用者がいかに、それぞれの要求を充たすことができるかが最も大切なことで、図書館員はあらゆる業務でバックアップをする努力が基本であることはいうまでもない。

4.

戦後あらゆる物資が欠乏している中で図書館利用者の増加と利用者の便を図る為に苦闘していたであろう様子が窺える貴重な資料が、県立図書館に残っている。極めて劣悪な紙にガリ版で刷られ判読もしにくくなっている、昭和22年8月20日発行の『大分県立大分図書館報』第1巻第1号が発行されている。第2号は23年2月、第3号は23年8月、第四号（24年に出されているが欠損）、そして24年11月から『大分県中央図書館報』が活版刷りで発行された³⁾。

第1号の冒頭に「館内閲覧」として次のように報告されている。

最近に於ける本館の状況を申し述べまして、皆様方の何かの御参考に供したいと存じます。戦災校金池校の一隅を借受けて甦生の根城と定めました本館は、現在僅か2教室を借受けて事務室・書庫・閲覧室に当てています。其の狭隘にして不便ことは並大抵ではありませんが、殊に本年7月以降各学校の暑休に入ると共に、閲覧者は日々に激増して、毎日平均百三四十人を下らないのでございます。是等の人々は狭い閲覧室のみには収容し切れず廊下か他教室まではみ出して、此の炎天下汗をふきふき祖国再建の眼を輝かしている姿は、実に涙ぐましく頼母しいものです。

なお閲覧者の状況は4月から7月までの合計で児童生徒は男子3624名、女子1621名、合計5245

名、一般は男子1177名、女子110名、合計1287名となっており、一般女子の少ないのが目立つが当時の情勢は、読書などの余裕のなかったことを示しているものと考えられる。さらに閲覧図書としては同期間の合計が新聞雑誌も含めて7927で、その中で文学は3550で46%を占め、新聞雑誌は1431で18%となっており、他は5%以下で語学は8%しかないのは本が少なかったとも考えられる。また図書別統計ではリーダーズダイジェストが3月から7月までに85人、『夏目漱石全集』が73人、『戦争と平和』は42人などが多い方で、『資本論』は16人、『東京裁判』20人等が多く読まれたものとしてあげられている。

第3号には、「復興第1年を迎えて」と題して山室館長の巻頭の言葉が載っている。

戦災後！約3年振りに県庁前の旧位置に76坪の新館が完成して去る4月28日に引移った。

思えば感慨無量である。

昭和20年7月16日館舎は全焼、その後館員は僅か3名になった。

此の苦境の中・・・金池校の衛生室を借受けることになって、そこに移ったのが、8月20日、ささやかながら図書館と言う本拠が出来た訳だ。爾来3ケ年、洵に狭隘ではあったが、此の部屋こそ、吾が図書館更生の基盤を与えて呉れた揺籃の室である。・・・椅子一つなき無一物から立ち上がったのである。

このような苦難を経て、漸く図書館の新築に漕ぎつけ、「個人住宅の様だ」と評された位の小規模なものであるが本拠が出来、館員一同“文化基盤の図書館”を念頭に精進を続けたのである。

注

- 1)『近代日本図書館の歩み 地方篇』日本図書館協会 1992 p. 775
- 2)『創立五十周年記念 大分県立大分図書館要覧』大分県立大分図書館 1953 p. 2～13
- 3) 大分県立図書館所蔵『館報』綴り

(よしだ とよはる 別府大学)